

【研究ノート】

イサク奉獻の物語

～ 文学的視座からみたルターの義認論 ～

村岡 三奈子

The Binding of Isaac: A Literary Perspective on Martin Luther's *Sola Fide*

Minako MURAOKA

Abstract

On October 31, 1517, Martin Luther (1483-1546) proposed his *Ninety-five Theses* in Wittenberg, Germany, which marked the beginning of the Protestant Reformation quickly spread throughout Europe. Luther's spiritual experience and theological transformation are on the basis of Romans 1:17, "the righteousness of God is revealed from faith to faith; as it is written, 'The just shall live by faith.'" He hence cultivated a new perspective into the Biblical hermeneutics, including his translations of the Bible, and his lectures on the Psalms and Pauline epistles. Luther devoted himself to the expository study of Genesis in his final ten years of life, which is highly valued as the compilation of his doctrine of justification by faith alone (*sola fide*). Throughout the ages, the story of the Binding of Isaac in Genesis 22 has provided creative and productive interpretations in the light of Abraham's faith and obedience. Luther's scriptural exegesis is, however, intrinsically construed in accordance with the divine grace for sinners, which most prominently epitomizes his faith in the justice of God.

KEYWORDS: The Binding of Isaac, Martin Luther, literary perspective

I

1517年10月31日、マルティン・ルター（Martin Luther, 1483-1546）がドイツのヴィッテンベルクにおいて公にした「九十五箇条の提題」を端緒として瞬く間にヨーロッパ全土に広がった宗教改革は、今年、500周年を迎える。「私たちの主であり、また教師であるイエス・キリストが、『悔い改めのサクラメントを受けよ』と宣したとき、イエス・キリストは信じる者たちの生涯のすべてが悔い改めであることを願った⁽¹⁾」という第一のテーゼに収斂されるルター神学は、「神の義」と「神の恵み」とを同時的概念として捉える彼の聖書理解と軌を一にする。若くしてヴィッテンベルク大学の神学教授となったルターは、いわゆる「福音の再発見」と呼ばれる信仰義認説

によって、従来の二項対立的な聖書解釈に相対する新しいパースペクティブを切り拓いた。ドイツ語聖書の翻訳と並行して行われた、詩篇やパウロ書簡の講義においても、このパースペクティブは一貫している。さらに、生涯最後の10年の歳月を費やしてその完成に精魂を傾けた創世記全50章、総頁数2000頁におよぶ浩瀚な講義録に、彼の神学的総括としての義認論の深化を見ることができる⁽²⁾。就中、創世記第22章は、古来、神学はもとより、哲学、歴史学、心理学など、さまざまな視点から多種多様な解釈を許容してきたが⁽³⁾、その多くはアブラハムの信仰と服従を能動的に理解するものである。他方、人間の罪を最も深く認識し、それゆえにまた、力強く義認の恵みを語ったルターは、ここに、アブラハムの真実の悔い改めと、低きに降る神の愛、主イエス・キリストの贖罪を見るのである。本稿では、ルター神学の前提となる原罪論を射程に入れながら、イサク奉献の物語をめぐる義認論を文学的視座から解き明かす。

II

創世記第22章 1-19節は、信仰の父アブラハムの試練、すなわち約束の子イサクを燔祭として捧げよとの神の命令をめぐる物語である。初めに、深いルター受容が見られる現代の神学者、ゲルハルト・フォン・ラートとクラウス・ヴェスターマンの解釈に倣いつつ、テキストの文学的構造と釈義を分析する⁽⁴⁾。ルターの講義はラテン語で行われたが、ここに引用するテキストは、George V. Schick の英訳 *Luther's Works : Lectures on Genesis, Chapters 21-25* (vol. 4) に依る。

テキストは、創世記第12章からつづくアブラハム物語の一章である。構造上、7-8節の対話を頂点として、神の御言と、それに応答するアブラハムの行動とが三部構成で交錯配列をなしており、反復する語句もそれぞれ対応関係にある⁽⁵⁾。

I	神の呼びかけ (1 節)	“Abraham!”
	アブラハムの応答 (1 節)	“Here am I.”
	神の命令 (2 節)	“Take your son . . . and offer him as a burnt offering.”
	アブラハムの行動 (3-6 節)	Abraham rose early in the morning . . .
II	イサクの呼びかけ (7 節)	“My father!”
	アブラハムの応答 (7 節)	“Here am I.”
	イサクの問い (7 節)	“Where is the lamb for a burnt offering?”
	アブラハムの答え (8 節)	“God will provide Himself the lamb for a burnt offering.”
III	アブラハムの行動 (9-10 節)	[Abraham] bound Isaac his son . . .
	御使いの呼びかけ (11 節)	“Abraham, Abraham!”
	アブラハムの応答 (11 節)	“Here am I.”
	御使いによる解放 (12 節)	“Do not lay your hand on the lad . . .”

¹ After these things¹ God tested Abraham² and said to him: Abraham! And he said: Here am I³.

² He said: Take your son, your only son Isaac, whom you love⁴, and go to the land of Moriah⁵, and offer him there as a burnt offering⁶ upon one of the mountains of which I shall tell you.

- 1) these things 「これらの出来事」の“things”は原語で「事」と「言葉」の両方を意味する。文脈上、第21章32-34節における事柄、すなわち、約束の子イサクの誕生、ハガルとイシュマエルとの離別、約束の地ベエルシェバ（誓いの井戸）の所有の出来事を指す。
- 2) God tested Abraham この物語全体を正しく理解する上で、“God”の一語が「著しく強調されている」ゆえに「最高度の重みを与えること」が求められる⁽⁶⁾。“Test”の原語は「試みる、試す、試練に遭わせる」等の意（出エジプト記第15章35節、第16章4節、第20章20節、申命記第8章2節、16節、第13章4節、第33章8節、士師記第2章22節、第3章1節、4節、詩篇第26篇2節、歴代志下第32章31節ほか参照）。この物語の主題である「神の試み」として提示される。
- 3) Abraham! ... Here am I 「アブラハム！」・・・「はい、ここに。」原語を直訳すれば“Here am I.”は「見よ、私を」であるが、しばしば応答の意「はい」として使われる。「呼びかけは、二つの人格を結び付け、接触を成立させる。この命令は、それがいかに恐るべきものであろうとも、このような親密な交わりの中から発せられたのである⁽⁷⁾。」
- 4) Take your son, your only son, Isaac, whom you love 「君の子、君の愛する独子、イサク」と、同一の目的語が緊張度を増し加えながら、三回にわたって繰り返される。「君の愛する独子」という表現も、犠牲の大きさを強調する。
- 5) go to the land of Moriah 「モリヤの地に赴きなさい。」モリヤは、旧約聖書中、二箇所而言及される。歴代史下第3章1節では、ソロモンがエルサレム神殿を建設した山を指すが、ここでは薪もない荒野を想定していると考えられる。
- 6) offer him there as a burnt offering 「そこで彼を燔祭として捧げなさい。」「燔祭」は古代イスラエルの祭儀における最も重要な献げもので、その肉は食することなく焼き尽くされた（レビ記第3章）⁽⁸⁾。創世記第12章1節で「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」と命じられた神は、アブラハムの「過去」を断たれたのに対して、ここではアブラハムの「未来」を断つことを命じておられる。約束の子イサクは「未来のイスラエル全体を指す⁽⁹⁾」がゆえに、アブラハムは「彼の未来全体を放棄するように迫られている⁽¹⁰⁾」のである。

³ So Abraham rose early in the morning, saddled his ass, and took two of his young men with him, and his son Isaac. And he cut the wood for the burnt offering, and arose and went to the place of which God had told him¹⁾.

- 1) rose early in the morning, saddled his ass, and took ... cut the wood ... arose and went ... 「翌朝早く起き、驢馬に鞍をおき、（二人の若者とその子イサクを）連れ・・・燔祭の薪を割り・・・立って赴いた。」テキストは、アブラハムが夜のうちに神から与えられた命令に忠実に従う様子を丁寧に報告する。しかし、彼の情緒の内面については一切、沈黙を守ってい

る。読者は「この物語の謎を単なる心理的説明で解消してしまわないようにする⁽¹¹⁾」ことが求められる。

⁴ On the third day¹⁾ Abraham lifted up his eyes and saw the place afar off.

1) the third day 「三日目」は「神顕現」(出エジプト記第19章11-16節)、「巡礼の時」(出エジプト記第3章18節、第5章3節、第8章23節)、「救済」(列王記下第20章5節、ホセア書第6章2節)などに関連したカイロス、すなわち決定的な神の時を暗示する。三日の旅の間、アブラハムと息子イサクは、ほとんど無言のうちに歩みを進める。この物語は、深い沈黙に支配されている。

⁵ Then Abraham said to his young men: Stay here¹⁾ with the ass; I and the lad will go yonder and worship, and come again to you.

1) Stay here 「お前たちはここに居れ。」ゲッセマネの場面(マタイの福音書第26章36節)で、主イエスが弟子たちに語られた言葉と同じ言葉が用いられている。

⁶ And Abraham took the wood of the burnt offering and laid it on Isaac his son¹⁾. And he took in his hand the fire and the knife. So they went both of them together²⁾.

1) laid it on Isaac his son 「(薪を)イサクに背負わせる。」同じ語“laid”が9節で用いられる。

2) So they went both of them together 「彼らは二人一緒に進んで行った。」ここも全く同じ表現が8節で繰り返される。

⁷ And Isaac said to his father Abraham: My father! And he said: Here am I¹⁾, my son. He said: Behold, the fire and the wood; but where is the lamb for a burnt offering?

⁸ Abraham said: God will provide Himself the lamb for a burnt offering, my son²⁾. So they went both of them together³⁾.

1) Here am I 1節後半および11節の、神および天の御使いとアブラハムとの問答と同じ形が、アブラハムとイサクの対話の中で交わされる。アブラハムは、神の呼びかけに対してと全く同じ言葉で“Here am I.”と答える。彼は「神の御顔の前に全身をさらし、神の語りかけを全身で受け止めるように、イサクに対面し、イサクの言葉を受け止める⁽¹²⁾。」

2) God will provide Himself the lamb for a burnt offering 「燔祭の小羊は何処にあるのです」と尋ねるイサクは、神を礼拝することを真剣に問うている。イサクの問いに対して、「神御自

身が燔祭の小羊を備え給うだろう。」という父アブラハムの答えは、「この問いに答える者としての神を指し示している⁽¹³⁾。」

- 3) So they went both of them together 「かくて二人はともに進んでいった。」6節の繰り返し。沈黙から対話へ、再び沈黙へと、心理的緊張感が高まる。

⁹ When they came to the place of which God had told him, Abraham built an altar there and laid the wood in order. And bound Isaac his son¹⁾ and laid him on the altar, upon the wood²⁾.

- 1) bound Isaac his son 「その子イサクを縛った。」名詞形が「(イサクを)縛ること」を指し、この創世記第22章の物語の呼び名として使われるようになった。
2) laid him on the altar, upon the wood 「祭壇の薪の上においた。」6節では「イサクの上」に薪があったが、9節では「薪の上」にイサクが置かれ、逆転が起こっている。

¹⁰ Then Abraham put forth his hand and took the knife to slay his son¹⁾.

- 1) slay his son 「まさにその子をほふろうとした。」「屠る」は、献げものとして殺すこと(出エジプト記第29章16節、レビ記第3章2節、イザヤ書第57章5節ほか参照)。

¹¹ But the angel of the Lord called to him from heaven¹⁾ and said: Abraham, Abraham! And he said: Here am I²⁾.

- 1) the angel of the Lord 「ヤハウェの使い」の呼びかけ。1節と並行しているが、特に“Abraham, Abraham!”と二回繰り返されることで、緊張度が高められる。「この声が、全体の転換点をなす。この声には、すでによき使信の喜びが共鳴している⁽¹⁴⁾。」
2) Here am I 「はい、ここに。」1節、7節につづき、三度、アブラハムは同じ言葉で答える。「アブラハムは三回語りかけられ、『ここにおります』と三回応答している・・・彼は言葉の前に立っている⁽¹⁵⁾。」

¹² He said: Do not lay your hand on the lad or do anything to him¹⁾; For now I know that you fear God²⁾, seeing you have not withheld your son, your only son, from Me³⁾.

- 1) Do not lay your hand on the lad or do nothing to him 「あなたの手を、その若者に下してはならない。彼に何もしてはならない。」約束の子イサクを捧げよと命じられた神が、ここではそれを翻される。「神ご自身の自己矛盾」と呼んだルターの問題提起は、現代というコンテキストにおいても、重要な意味をもつ。「このテキストは、神の試みと神の備えという矛

盾のただ中に、アブラハムの生を設定している・・・命令と約束の間に、生命を奪い取る死の宣告と生命を与える生の宣言の間に、アブラハムの生がある。アブラハムへの招きは・・・この神の前で生きることへの招きである⁽¹⁶⁾。」

- 2) now I know you fear God 「今、わたしは知ったからだ、あなたが神を畏れる者であることを。」「神を畏れる」とは、聖なるものへの畏敬にとどまらず、祭儀や礼拝を捧げること、また律法を遵守することなどを意味する。したがって、旧約聖書で「神の恐れ」ないし「神を畏れる」という言葉は、神の命令に対する服従を表す⁽¹⁷⁾（創世記第20章11節、第42章18節、列王記下第4章1節、イザヤ書第11章2節、箴言第1章7節、ヨブ記第1章1節、8節参照）。
- 3) you have not withheld your son, your only son, from Me 「〔あなたは、〕あなたの息子を、あなたの独り子を、わたしに対して惜しなかった。」御使いの言葉は、パウロの言葉にその反響を聞くことができる。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう」（ローマ人への手紙第8章32節）。

¹³ And Abraham lifted up his eyes and looked, and behold, behind him was a ram¹⁾, caught in a thicket by his horns; and Abraham went and took the ram, and offered it up as a burnt offering instead of his son²⁾.

- 1) Abraham lifted up his eyes and looked, and behold, behind him was a ram 「アブラハムは目を上げた。そして背後に・・・雄羊がいるのを見た。」身代わりの小羊は、偶然に、あるいは幸運にも現われたものではない。カール・バルトは、ラテン語の「前もって見る(pro-video)」を神の摂理(providence)と結びつけて解釈している。
- 2) Abraham . . . offered it up as a burnt offering instead of his son 「アブラハムは〔その雄羊を〕自分の息子の代わりに、全焼の献げものとして献げた。」

¹⁴ So Abraham called the name of that place The Lord Will See¹⁾; as it is said to this day: On the mount the Lord will see²⁾.

- 1) Abraham called the name of that place the Lord Will See 「アブラハムは、その場所の名を、『ヤハウェは見る(ヤハウェ・イルエ)』と呼んだ。」神は、深き淵にある人の苦しみを見られる。“The Lord Will See.” この名前は「深い苦難からの解放の表現であり、喜びの表現であり、神への賛美⁽¹⁸⁾」に他ならない。物語における、この「試み・備え」の弁証法は、「十字架・復活」の弁証法となっている。「イエスの十字架は、神の試みの究極的表現である・・・受難の言葉が、十字架という試みについて語っているように、それらはまた、神の究極的な備えとしての復活についてもまた語っている⁽¹⁹⁾。」
- 2) it is said to this day: On the mount the Lord will see 「今日では、『ヤハウェの山で、〔ヤハウェ

は「見られる（イエーラーエー）」と言われている。「イエーラーエー」は「備えがある」と訳されることが多い。「主は備えてくださる」と訳すと、8節の“God will provide”に呼応する。ただし、原語では、“The Lord Will See”の「イルエ」と“the Lord will see”の「イエーラーエー」は、「ラーア」（見る）の能動形と受動形であるから、「見る」と「見られる」のように対照して訳するのがより適切であると考えられる。「見る」神が、同時に「見られる」神であるということ。「この物語のどこでもヤハウェはアブラハムに語りかけるだけで、姿を見られてはならず、そもそも神の姿を見た者は死ぬというのが旧約の伝統的理解であった。この革新的な表現は、「神を見る」、すなわち「神との最も親しい内面の交わりを知る」ことこそ「神が見られる」ことの証左である⁽²⁰⁾。

¹⁵ And the angel of the Lord called to Abraham a second time from heaven and said:

文学構造上、この物語は14節で終わり、15節から18節は、後の時代の加筆であるとされる。文体的にも、14節までの抑制のきいた語り口と大きな差異を感じさせる。

¹⁶ By Myself I have sworn, says the Lord. Because you have done this and have not withheld your son, your only son¹⁾,

1) you have not withheld your son, your only son 「あなたが、あなたの息子を、あなたの独り子を、惜しなかったから。」アブラハムに対する祝福の根拠が、12節の言葉によって繰り返される。

¹⁷ I will bless you, and I will multiply your descendants as the stars of the heaven and as the sand which is on the seashore. And your descendants shall possess the gate of their enemies¹⁾.

¹⁸ And by your Seed shall all the nations of the earth be blessed²⁾, because you have obeyed My voice.

1) your descendants shall possess the gate of their enemies 「あなたの子孫は、その敵の城門を勝ち取る。」族長物語には並行箇所が見られないが、「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」(創世記第3章15節)のエコーであることは明らかであろう。「女の子孫」(単数形)が与えられ、神の敵であるサタンは彼の「かかとかみつく」が、彼はサタンの「頭を踏み砕く」という約束は、救済史的に見れば、全人類の救い主イエス・キリストによって成就する。ルターは、「キリストはこの婦の子孫なのであり、悪魔の首すなわち罪と死と地獄とまた彼のすべての力とを踏み砕きたもうたのである。」と述べた上で、創世記第22章18節「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福されるであろう。」に言

及している⁽²¹⁾。

- 2) I will bless you, and I will multiply your descendants . . . By your Seed all the nations of the earth be blessed 「わたしは、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を . . . 豊かに増し加えよう . . . あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福されるであろう。」アブラハムの信仰に対する神の祝福が、彼の一族にとどまらず、イスラエル民族、さらには「地のすべての国々」に及ぶことが預言される。

¹⁹ So Abraham returned to his young men¹⁾, and they arose and went together to Beer-sheba; and Abraham dwelt at Beer-sheba²⁾.

- 1) Abraham returned to his young men 「アブラハムは、彼の若い従者たちのもとに戻った。」アブラハムはイサクと「一緒に」赴いたのだが、ここにイサクの姿はない。
- 2) Abraham dwelt at Beer-sheba 「アブラハムはベエル・シェバに住んだ。」ベエル・シェバは、南パレスチナのオアシス。「七つの泉」(創世記第21章28 31節)または「誓いの泉」(同31節)を意味する。アブラハムは元来ここに住んでおり、別の伝承では、イサクもここに住んで祭壇を築いている(同26章23 25節)。

III

新約聖書ローマ人への手紙第1章17節をもとにパウロが解釈した「神の義」の概念は、ルターが改革の旗幟として掲げるキリスト論と重なり合う。すなわち、神が罪人を審く能動的義(*justitia activa*)ではなく、神の恵みの賜物として罪人である人間に与えられる受動的義(*justitia passiva*)こそが、ルターによる「福音の再発見」の内実である⁽²²⁾。

. . . I had conceived a burning desire to understand what Paul meant in his Letter to the Romans, but thus far there had stood in my way, not the cold blood around my heart, but that one word which is in chapter one: "The justice of God is revealed in it." I hated that word, "justice of God," which, by the use and custom of all my teachers, I had been taught to understand philosophically as referring to formal or active justice (emphasis added; hereinafter the same), as they call it, i.e., that justice by which God is just and by which he punishes sinners and the unjust . . . I meditated night and day on those words until at last . . . I began to understand that in this verse the justice of God is that by which the just person lives by a gift of God, that is by faith. I began to understand that this verse means that the justice of God is revealed through the Gospel, but it is a passive justice, i.e. that by which the merciful God justifies us by faith, as it is written: "The just person lives by faith." All at once I felt that I had been born again and entered into paradise itself through open gates.

「キリストは聖書の内容であって、審判においてまた恵みにおいて、聖書を媒介にしてわれわれにくることを望んでおられる。*Sola scriptura*（聖書のみ）は、*solus Christus*（キリストのみ）と同じであり、それは、さらに *sola gratia*（恵みのみ）や *sola fide*（信仰のみ）と同じである⁽²³⁾。」ルターの創世記第22章の講解もまた、この聖書の使信に基づいている。そして、その使信とは、賜物としてのキリストを証言することに他ならない⁽²⁴⁾。ここでは、ルターの十字架の神学の基軸をなすキリスト論に絞って、イサク奉獻の物語を解釈する⁽²⁵⁾。

1. アブラハムの試練

族長の歴史の中で「信仰の父」と呼ばれるアブラハムの生涯は、創世記第12章から第25章にわたって記されている。

... both parents loved him [Isaac] exceedingly, because he had been born to them in their old age and had the promise of God concerning the future blessing of the entire world, and both were very happy because of this, and peace had been established in the house ... the solicitous parents were now considering the choice of a wife evidently in order that the Promised Seed might soon be raised up behold, these very fine plans and very pleasing thoughts of the parents about the marriage of their son are upset and confounded by a single word, namely, by the Lord's command to Abraham to take his son and sacrifice him.⁽²⁶⁾

彼が神の召しに応え、「行く先も知らずに」出で立ったのは75歳の時であった（創世記第12章4節）。住み慣れた地を離れ、親しい人々と別れ、平穏な暮らしを捨て、全てを断念して、ただ神の召しに従ったのである⁽²⁷⁾。その後も、さまざまな試練に曝され続けた。「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」（第12章3節）、「あなたの子孫は星の数ほどに増える」（第15章5節）との神の約束の実現には、25年の歳月を待たねばならなかった。しかし、アブラハムにとって最も厳しい試練は、イサク誕生によってようやく訪れた平穏な生活を断ち切るかのごとく、突然に訪れた。神は、約束の子イサクを燔祭の捧げものとして犠牲にすることを命じられたのである。

Accordingly, Abraham is being more severely tried than Mary when she lost her Son at Jerusalem ... here God, who had given the son, commands that the son be killed by the father himself. What hope, then, could the father have?⁽²⁸⁾

ルターは、経験のひとつと呼ぶには余りに深刻な、このモリヤの地におけるアブラハムの出来事を、エルサレムで御子イエスを失った母マリアのそれと対比する⁽²⁹⁾。「剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう」（ルカによる福音書第2章35節）。そして彼は、自らの手で愛児を屠るという

アブラハムの試練に、一切の希望を絶たれた人間の極限の痛みを読み取る。

Here God is clearly contradicting Himself; for how do these statements agree: “Through Isaac shall your descendants be named” (Gen. 21:12) and “Take your son, and sacrifice him”? . . . This trial cannot be overcome and is far too great to be understood by us. For there is a contradiction with which God contradicts Himself. It is impossible for the flesh to understand this; for it inevitably concludes either that God is lying and this is blasphemy or that God hates me and this leads to despair. Accordingly, this passage cannot be explained in a manner commensurate with the importance of the subject matter . . . I am unable to resolve this contradiction.⁽³⁰⁾

アブラハムに約束の子イサクを授け、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」(創世記第21章12節)と語られた神が、なぜ今、まさにその子どもを燔祭として捧げよと命じられるのか。神は明らかに自己矛盾を犯しておられる、とルターは問わざるを得ない。理解を絶する試練を前にして、然し、彼は思弁的に解釈することを敢えて拒否する。これは、隠された神の秘儀であり、信仰の奥義なのである。そのことを弁えた上で、ルターは“I am unable to resolve this contradiction.”と記して、アブラハムと共に、神の御声に耳を傾ける。

2. キリストの比喩形象としての雄羊

神の命じられた場所に、アブラハムは祭壇を築いて薪を積み、その上に息子イサクを横たえる。刃物を取り、イサクの上に振りかざして屠ろうとした瞬間、神はそれを押しとどめられる。「アブラハムよ、アブラハムよ！あなたの手を、その若者に下してはならない。彼に何もしてはならない。」アブラハムが目を見ると、藪に一頭の雄羊がいるのを見た。

At this point it is customary to ask where this ram came from. The Jews say that he was created on the sixth day together with the rest of the animals and that by a divine decree he was preserved up to that time. We Christians know that with God creating and preserving are identical. . . . Therefore I find no fault with saying either that the ram was brought there by the angel or that he was brought into existence at the angel’s command. I prefer to believe the latter. Nevertheless, it does not seem to have been a rash statement on the part of the fathers when they said that the ram was provided from the beginning of the world; for they knew about Christ, the woman’s Seed, and understood this ram to be a figure of Him.⁽³¹⁾

イサクの代わりに捧げられるこの雄羊は、どこから来たのか。ルターは、この時、天の御使いの命令によって雄羊が創造されたと解釈しているが、他方、「神の創造の第6日に、他の動物と共に造られたこの雄羊は、この時のために神が取っておられたのである」というユダヤの教えにも一定の理解を示している。彼らもまた、この雄羊をキリストの形象と捉えているからである。

For Christ existed before the creation, as Paul says (Titus 1:2): “God, who never lies, promised ages ago.” Hence before the ages, from eternity, Christ was destined by divine providence to crush the head of the serpent, to become the sacrifice for the human race, to kill sins, and to give us life. But He waited until the predetermined time of His appearance arrived. This is sufficiently good allegory. I do not disapprove of it.⁽³²⁾

備えられた雄羊がキリストの比喩形象であることの根拠として、ルターは「偽ることのない神が、永遠の昔から約束してくださった」(テトスの手紙第1章2節)を引く。創世記第22章17節の註釈に見るとおり、「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつづく」(創世記第3章15節)は、原福音である。

3. イサクの従順

父親の振り上げる刀に向かって自らの首を差し出すイサクについて、ルターは彼の従順を「ほふり場に引かれて行く小羊」(イザヤ書第53章7節)の姿になぞらえる。

The son is obedient, like a sheep for the slaughter, and he does not open his mouth. He thought: “Let the will of the Lord be done,” because he was brought up to conduct himself properly and to be obedient to his father. With the exception of Christ we have no similar example of obedience.⁽³³⁾

キリストは「あなたのみこころのままを、なさってください」(ルカによる福音書第14章36節)と神に祈られた。一切を父に委ねるイサクの姿が、「十字架の死に至るまで」従順であられたキリストの姿(ピリピ人への手紙第2章8節)に対比されている。実際、イサクは、モリヤの地に向かって、父と共に沈黙の三日間の時を過ごす。そして、あたかも死人の中から甦るようにして生命を取り戻す。それらは、いずれもキリストの死と復活を予表している。

4. 新しい契約

イサクの甦りに象徴されるキリストの復活 この慰めに満ちた福音こそ、罪と死に捕らわれていたすべての人々への新しい契約である。

Above God said: “In you, Abraham, all the families of the earth will be blessed.” There his Seed is included, but it is not expressed. But in this passage it is expressly stated: “In your Seed.” . . . Paul declares and explains that this Seed is Christ (Gal. 3:16). Then all nations are mentioned. Hence this promise also pertains to us Gentiles and to all who will ever hear and accept it, not only to the Jews. . . . These words truly deserve to be written in large letters of gold and to be continually before our eyes and in our heart. For this is our glory in the blessing through the Seed of Abraham the blessing we boast of and praise no less

than the Jews. . . . enjoy all the good things the Blessed Seed of Abraham brings, that is, Christ Jesus, the Salvation and Blessing of all nations.⁽³⁴⁾

ルターは、「ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました・・・その方はキリストです」(ガラテヤ人への手紙第3章16節)を引用して、アブラハムに与えられた神の祝福の約束が、キリストをとおして、新しい神の民全体に及び、この預言の重要性はどんなに強調してもしすぎることはないとする。

5. 信仰義認

新しい契約としてのキリストは、アブラハムの信仰義認の問題と密接に結びついている。ルターは「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた」(ローマ人への手紙第4章3節)を引用して、イサク奉献の物語は信仰義認のテキストである、と主張する。

Abraham was righteous by faith before God acknowledged him as such. Therefore James concludes falsely that now at last he was justified after that obedience; for faith and righteousness are known by works as by the fruits . . . this passage gives amplest confirmation of the doctrine concerning the righteousness of faith, namely, that we are justified by faith alone. For no blessing is to be hoped for except through the Seed of Abraham . . . we are blessed, not through ourselves but through Christ, who is our blessing . . . there is a refutation of our opponents in regard to the righteousness of works. Because works are not that blessing through the Seed of Abraham, it is clear that whatever righteousness or blessing through works is presumed is idolatry and a curse.⁽³⁵⁾

アブラハムは、その子イサクを犠牲として捧げた、その行ないによって義と認められたのではなく、神を信じた信仰によって義とされたのである。

For the promise does not depend on my merits or works; it depends on the Seed of Abraham. By Him I am blessed when I apprehend Him in faith; and the blessing clings to me in turn and permeates my entire body and soul, so that even the body itself is made alive and saved through the same Seed. And that begins in this life through faith when the soul, weighted down by death and sin, is buoyed up and receives the comfort of life and salvation. At some later time, in the resurrection of the dead, the body will follow the soul without any hindrance not instrumentally but effectively and, as it were, formally to the point that our lowly body will be changed “to be like the glorious body of Christ” (Phil. 3:21).⁽³⁶⁾

神の祝福は、いかなる人間の善行にも依存しない。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、

価なしに義と認められるのです」(ローマ人への手紙第3章23-24節)に見るとおり、ただキリストの贖いにより、罪の赦し、からだの甦り、永遠のいのちが約束される。「キリストは・・・私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです」(ピリピ人への手紙第3章21節)。ルターのキリスト論はここに極まる。

IV

ルターの義認論の前提には、彼の人間論がある⁽³⁷⁾。創世記講義において、彼は、詩篇第51篇5節やローマ人への手紙第7章18節を引用しながら、繰り返し、アダムとエバの墮落によって引き起こされた人間の原罪に言及する。

... the Spirit sets us free from the corruption and the blemish of original sin ... This blessing is so powerful and efficacious that it is able to destroy and abolish both death and the entire curse which was brought on as a result of original sin.⁽³⁸⁾

教会史において、パウロを除いては、恐らくルターほど人間の罪を深く認識し、それゆえにまた、力強く義認の恵みを語った者はいなかった。「義認論の力強さは、罪認識の深さに正確に比例する⁽³⁹⁾。」

先述のとおり、イサク奉献の物語は多元的で奥深い主題を包含しているが、ルターの原罪論を射程に入れるとき、このテキストの使信を最も直截に伝えているのは、神の命を受けたアブラハムがモリヤの地に赴く沈黙の三日間の場面であろう。

アブラハムでさえ、約束の成就としての賜物イサクを私し、それが奇跡的な贈与であったことを忘却し、後は神を排除して人間的計算で生きようとする、人間一般の罪への傾向性から自由でなかったのではないか・・・アブラハム物語の他の箇所のアブラハムが、神への疑問を率直に口に出すのを常としていたのに、ここでは沈黙のまま行動する・・・アブラハムは余りにイサクを愛し、神から心が離れて行った己が罪を薄々自覚しており、その痛いところを突いた神の命令の正しさを認めざるを得ず、それとてっさに抗弁することなく、自分の中でそれについて様々に思いをめぐらせ自問自答しつつ、三日の寡黙な旅路に赴いたのではなかったか。そう解さないと、他の箇所では、神と問答し対話するアブラハム像との齟齬が解せないのである⁽⁴⁰⁾。

ここで問われているのは、「人を殺してはならないという倫理の当為ではなく、我が子を愛しているという愛の事実」なのである⁽⁴¹⁾。この物語が愛を主題としているという視点は、森有正の創見に富んだ黙想に通底するものである。

人間の感情というものは、それが愛であっても、悲しみであっても・・・神の厳かな意志の下に、その最も清純な姿を期せずして表わすのではないだろうか。人間愛を否定するような所で、人間の愛が最も深い姿を、その驚くべき姿を示すのではないだろうか・・・彼〔アブラハム〕とこの約束を継ぐひとり子との愛情というものは、最も美しい、また最も自然な姿でここに現われたのです⁽⁴²⁾。

「最も清純」で「最も深い」人間愛が、神の厳かな意志に背く人間一般の罪への傾向性、すなわち原罪と結びつくならば、人はどうしてそれに抗うことが出来ようか。「イサクに死を与えるか、神の命に背くか、さらにその二者択一の隘路からどのように抜け出すかという苦悩によってアブラハムの存在が差異化されるカイロス⁽⁴³⁾」に、低きに降る神が介入される。アブラハムの罪と、キリストの義との「喜ばしい交換⁽⁴⁴⁾」が起こるためである。それはアブラハムにとって、「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」(ローマ人への手紙第6章8節)決定的な回心の体験であったに違いない⁽⁴⁵⁾。その真実の悔い改めこそが、寡黙な三日間の旅路の意味である。こうして、アブラハムは、深い死の淵で神の語りかけを聴く。“Abraham, Abraham! Do not lay your hand on the lad or do anything to him.” 一方的な神の憐れみ、恩寵による義認である。「汝の罪、赦されたり。」その瞬間、彼は真に「神を恐れる者」として新しく甦らされる⁽⁴⁶⁾。十戒における「殺すなかれ」の禁を犯し、みずからの善性をも「否定」して貫徹される神の愛⁽⁴⁷⁾ 御子キリストの贖罪によって天啓を受けたアブラハムに、福音の再発見を通して「天の門が開かれた！」ルター自身の姿を重ねることができよう。“I had been born again and entered into paradise itself through open gates⁽⁴⁸⁾.”

註 釈

- (1) マルティン・ルター「九五箇条の提題」『宗教改革三大文書』深井智朗訳(講談社学術文庫、2017年) 13頁。他に、ルターの生涯と神学については、以下を参照。アリスター・E・マクグラス『ルターの十字架の神学 マルティン・ルターの神学的突破』鈴木浩訳(教文館、2015年)、クリスティアン・メラー編『魂への配慮の歴史5 宗教改革期の牧会者たちI』加藤常昭訳(日本基督教団出版局、2001年)、金子晴勇・江口再起共編『ルターを学ぶ人のために』(世界思想社、2008年)、徳善義和『マルチン・ルター 生涯と信仰』(教文館、2007年) 同『マルティン・ルター ことばに生きた改革者』(岩波新書、2012年) ほか。
- (2) Martin Luther, *Luther's Works, vol.4: Lectures on Genesis, Chapters 21-25*. Trans. George V. Schick (Concordia Publishing House, 1964). 日本語訳は、関根正雄訳『旧約聖書 創世記』(岩波文庫、1967年)を参照。
- (3) 関根清三編著『アブラハムのイサク 献供物語 アケダー・アンソロジー』(日本キリスト教団出版局、2012年) は、キリスト教やユダヤ教のほか、文学、哲学、芸術や心理学まで、古代から現代に至る、様々な解釈を編年体的に幅広く集成している。
- (4) テクスト分析および註釈は、主としてウォルター・ブルッグマン『現代聖書註解 創世記』向井考史訳(日本キリスト教団出版局、1986年)、ゲルハルト・フォン・ラート『ATD 旧約聖書註解 創世記』山我哲雄訳(ATD/NTD 聖書註解刊行会、1993年)、クラウス・ヴェスターマン『コンパクト聖書註解 創世記I』山我哲雄訳(教文館、1993年)、関根清三編著「翻訳と本文批判」『アブラハムのイサク 献供物語 アケダー・アンソロジー』13-20頁を参照・引用した。ほかに、以下の註解書を参照。石川康輔ほか編『新共同訳 旧約聖書注解1』(日本基督教団出版局、1996年)、Bill T. Arnold, *New Cambridge Bible Commentary: Genesis* (Cambridge UP, 2008)、Iain Provan, *Discovering GENESIS: Content, Interpretation, Reception* (William B. Eerdmans, 2015)。

- (5) テクストの文学的構造については、『現代聖書註解 創世記』、318-333頁を参照。
- (6) 『ATD 旧約聖書註解 創世記』、423頁。
- (7) 『コンパクト聖書註解 創世記 I』、366-367頁。
- (8) 旧約聖書では、紀元前7世紀のエロヒスト資料(JE資料)で「あなたの息子のうち初子は、わたしにささげなければならない」(出エジプト記第22章29節)と長子の犠牲が命じられていたが、やがて紀元前6-5世紀の祭司文書(P資料)に見るとおり、「すべて最初に生まれる者を、主のものとしてささげなさい・・・ただし、ろばの初子はみな、羊で贖わなければならない・・・あなたの子どもたちのうち、男の初子はみな、贖わなければならない」(同第13章12-13節、第34章19-20節)と、その代替が規定される。紀元前8世紀後半になると、こうした祭儀上の献けものは否定され、「主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか」(ミカ書第6章7-8節)との信仰理解に達して、幼児犠牲は断罪されることになる。「あなたの子どもをひとりでも、火の中を通して、モレクにささげてはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。わたしは主である」(レビ記第18章21節、20章2-5節)。関根清三『旧約聖書の思想24の断章』(講談社学術文庫、2005年) 89-90頁参照。
- (9) 西村俊昭「創世記22章1-19節」『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ』No.18(日本基督教団出版局、1977年) 69頁。
- (10) 『ATD 旧約聖書註解 創世記』、424頁。
- (11) 同上、423頁。
- (12) 小泉健「創世記22章1-19節」『説教黙想 アレタイア』No.97(日本キリスト教団出版局、2017年) 60頁。
- (13) 『コンパクト聖書註解 創世記 I』、368頁。
- (14) 同上、369頁。
- (15) 『現代聖書註解 創世記』、322-323頁。
- (16) 同上、330-331頁。
- (17) 『ATD 旧約聖書註解 創世記』、428頁。
- (18) 『コンパクト聖書註解 創世記 I』、370頁。なお、ルターの作詞・作曲による讃美歌258番「主よ、深き淵の底より」は、267番「神はわがやくら」と共に、宗教改革から生まれた作品としてよく知られ、彼が愛読した詩篇130篇に基づく。
- (19) 『現代聖書註解 創世記』、332頁。
- (20) 『旧約聖書の思想24の断章』、101頁。「神の姿を見た者は死ぬ」の根拠は、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」(出エジプト記第33章20節)ほか参照。新約聖書でも「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです」(ヨハネの手紙一第4章12節)と記されている。小林和夫は、キリスト証言としての聖書六十六巻を論じた中で、アブラハムによるイサク奉獻の出来事を、ヨハネによる福音書第8章56節「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいて。そしてそれを見て喜んだ」の御言につなげて解釈し、「アブラハムはイサクを捧げて、その息子を死の世界からよみがえらされて受け取ることで、イエス・キリストの十字架と復活を見ました」と指摘する。『小林和夫著作集第1巻』(いのちのことば社、2010年) 19-21頁。
- (21) マルティン・ルター「新約聖書への序言」『キリスト者の自由』石原謙訳(岩波文庫、1955年) 60頁。
- (22) 橋本昭夫「パウロ解釈の新視点についての一考察 ルター神学の立場から」『福音主義神学』第46号(日本福音主義神学会、2015年) 80頁。ルターのいわゆる「塔の体験」については、晩年の『ラテン語著作全集第一巻序文』(1545年)において回想されている。英訳の引用は、Internet Christian Library, “Preface to the Complete Edition of Luther’s Latin Works” (1545), Trans. by Bro. Andrew Thornton, OSB, from the “Vorrede zu Band I der Opera Latina der Wittenberger Ausgabe.1545” in vol. 4 of *Luthers Werke in Auswahl*, ed. Otto Clemen, 6th ed., (Berlin: de Gruyter, 1967), pp. 421-428 <<http://www.iclnet.org/pub/resources/text/wittenberg/luther/preflat-eng.txt>>.
- (23) ウィレム・J・コーイマン『ルターと聖書』岸千年訳(聖文舎、1971年) 59頁。
- (24) 橋本昭夫「ルター主義における釈義原理」『福音主義神学』第30号(日本福音主義神学会、1999年) 49頁。
- (25) 石瀬博「マルティン・ルター『創世記講解』」関根清三編著『アブラハムのイサク献供物語 アケダー・ア

ンソロジー』、85-92頁を参照。

(26) *Lectures on Genesis* [Kindle 6 version], Chapter 22, para. 3.

(27) ヴェスターマンは、アブラハムが「断念をしなければならない人間」であり、「彼の生は本質的には断念さるべき生」であったと語る。クラウド・ヴェスターマン『千年と一日 旧約聖書と現代』岩崎修訳（聖文社、1971年）48-49頁。したがって、「もしこの物語から、一人の人間の名誉が読み取られるとしたら、この物語は誤解されたことになる。アブラハムへの賛辞（キルケゴール）は、この物語の意味から逸れてしまう。」『コンパクト聖書註解 創世記Ⅰ』、371-372頁。

(28) *Lectures on Genesis* [Kindle 6 version], Chapter 22, para. 13.

(29) 他方、イサクの出生についても、御使いガブリエルから受胎告知を受けるマリヤの言葉に、御子イエスの予表を見ることが可能であろう。森有正は、イサクの出生の出来事に、アブラハムの心の動きを次のように読み解く。「心の一番底でアブラハムは、ああやっぱりそうかと思ったことと思います・・・百の齢になるまで、一つのものが欠けていたため苦しんできた、それだけのためにおそらく神の豊かな約束の前に、それを満たすことのできない自分に約束される神の前に、何を彼は感じていたでしょう。その子供が突然現われた時に、彼はほとんど喜ぶことができなかったのです・・・と同時に・・・神がその子をもう一遍取り上げようとした時に、彼は少しの驚きも示していません。全くただ神の言葉に従順に従いました・・・アブラハムの心の中には非常に深い悲しみがただ流れていただけだと思います・・・言葉にすることのできない心の中の一つのある弦に神様が触れたように思った、と思います。」森有正『アブラハムの生涯』（日本キリスト教団出版局、1980年）98-101頁。なお本書は、1970年に国際基督教大学のチャペルで行われた5回にわたる連続講演を起稿したものである。

(30) *Lectures on Genesis* [Kindle 6 version], Chapter 22, para. 5, 9, 11.

(31) *Ibid.*, para. 192, 195-196.

(32) *Ibid.*, para. 197.

(33) *Ibid.*, para. 87.

(34) *Ibid.*, para. 276-280.

(35) *Ibid.*, para. 177, 387-389.

(36) *Ibid.*, para. 311-312.

(37) 「義認論のスペクトルは、その背後にある人間論のスペクトルの反射である」として、鈴木は、ルター神学におけるアウグスティヌスの思想の影響を論じる。詳細は、鈴木浩「義認論の前提としての原罪論」日本ルーテル神学大学ルター研究所編『ルター研究』第4巻（聖文舎、1988年）175-193頁参照。

(38) Luther, Chapter 24, para.160, 331.

(39) 鈴木浩「アウグスティヌスとルター」『ルター研究』第7巻（2001年）115頁。

(40) 関根清三「イサク献供物語の哲学的解釈」『アブラハムのイサク献供物語』、325-326頁。

(41) 『旧約聖書の思想24の断章』、98頁。

(42) 『アブラハムの生涯』、101-102頁。

(43) 宮本久雄「アブラハムの受難と他者の地平」『アブラハムのイサク献供物語』、292頁。宮本久雄ほか編著『受難の意味 アブラハム・イエス・パウロ』（東京大学出版会、2006年）所収の論文より一部抜粋。

(44) 「キリスト者の自由について」第12項『宗教改革三大文書』、381頁。

(45) 中世のラテン語の歌をもとに、ルターは「生のただ中であってわれわれは死のうちにある」という讃美歌を残したが、『詩編90編講義』の序文では、この歌を律法の歌と呼び、「死のただ中であってわれわれは生の内にある」と書いて、生と死の福音的逆説を説いた。徳善義和『ルターと讃美歌』（日本キリスト教団出版局、2017年）参照。

(46) 「イサク献供物語の哲学的解釈」、327頁参照。

(47) 『旧約聖書の思想24の断章』、236頁参照。

(48) “Preface to the Complete Edition of Luther’s Latin Works,” para. 25.

（2017年10月27日 受理）